
彼女は半分幽霊で

ディライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は半分幽霊で

【Nコード】

N9473Z

【作者名】

デリライト

【あらすじ】

ある日忘れ物を取りに深夜の学校へ忍び込むと、教室にいたのは見知らぬ美少女。彼女は天冠を取ると人間に戻ることのできる幽霊だった。って、それって幽霊って言うの？ちょ、っ、憑いて来るなっ！

杉太と幽子のちょっと不思議なラブコメディー。

第1話：出遭いは突然に（前書き）

デイトライトと申します。

初めにこの小説は不定期連載です。もう一つ連載作品を持っていて、そちらで書き詰まったりなんかした時に気分転換で書こうと思っています。

まあ沢山反響があればこっちの比重も多めにしようかと考えてますが、そんな筈はないので。

ではのほほんとスタートです。

第1話：出遭いは突然に

早速であるが、一つ質問させてもらってもいいだろうか？
質問をするのに承諾を得る、なんて野暮ったいことをしてしまった
が、俺の聞きたい事はずばりこれだ。

『幽霊に会ったことがありますか？』

何言ってるんだこのタコスケは。

どこの馬の骨ともわからぬアホが何か抜かしてるぞ。

・・・なんて思われてる方が多数であると思う。

俺もいきなり親友にこんな質問をぶつけられたら長年の固い絆もバラバラになるし、恋人に言われたなら百年の恋も一気に氷点下さ。
よし、わかった。

じゃあ、質問を変えよう。

『幽霊に会いたいと思いますか？』

勝手に会ってるポケナス。

会うの字が違う、正しくは遭うだろマヌケ。

・・・なんて思われてる方が多数であると思う。

俺も会いたい・・・いや遭いたいなんて思わないね。祟られて人生
急転直下なんて話はよく小耳に挟むもんだ。怖い目にあってトラウ
マになるってのもよくある話だな。

そう幽霊にいいイメージなんて無い。

大体がそうさ。

好んで幽霊に遭いに行くやつなんてよっほどのオカルトマニアか、
はたまた怖がる彼女に抱きつかれたいがために意気揚々とお化け屋
敷に乗り込む彼氏ぐらいなものだろう。

つていうか遊園地なんて楽しげなところにお化け屋敷とか本来浮きすぎだろ。

幽霊なめんな、なんて本物の幽霊様から苦情が来たりしないもんかね？

おっと話が逸れたが、要するに俺が言いたいののはな？

幽霊になんて怖いし祟られるし憑かれるし呪われるし他にも何されるかわかったもんじゃない。

だからそんなヤツに遭いたいなんて気持ちはミジンコほどもありやしないってことだ。

皆もそう思うだろ。そんな物騒なことにわざわざ関わりたがるやつなんてそういないのさ。

ただ、俺が何故こんな話を始めたか。

勘がいい方ならもうお気づきかと思われるが、

・・・・・・・・・・・・・・・・遭っちまったんだな。これがさ。

しかも、その幽霊がさ

「うつそだろ!？」

衝撃の事実だ。

今日出された物理?の課題であるプリントが、俺の鞆から忽然と姿を消していた。

「ちょ、マジかよ!？なんで・・・ハ！」

思い出した。そう言えば帰り際、どうにも体操着が鞆に入らなくて一度整理するために中身を全部出した。まさかあの時除外して机の中に入れたノート群の中に・・・・・・・・。。。

はあ………。

俺は、来須^{くるす}杉太。まあごくごく普通の高校生二年生だ。

……今苗字と名前逆にしたら、とか思っただろ？ちよつと英語できます的に発音するところなるよね。的に思っただろ？

英語の授業なんて、

「Mr. Santa Kurusu!」

なんて言われるんだぞ。

悪かったなサンタクローズでさ。でも何もやらんぞ。

何故だか無性に自己紹介がしなくなった俺はふと時計に目をやると、
現在午前1時。

「今から……か……」

どうにもやる気が起きなくて、部屋で呑気に菓子を食いながらテレビを見ていたらもうこんな時間だ。

さあて、追い込まれた事だしいつちよ課題を片付けますか！

そう思った矢先にこれだよ。

しかし明日の物理？の先生は鬼教師で有名で、宿題を忘れようもんならフレミングの法則両手で5時間耐久の刑に処されかねん。意外とあの指の形疲れるんだぞ。

「仕方ない……行くか」

俺はひとりごちて、上下スウェットのままさつさと家を飛び出した。

俺の通う県立山之上高校へは徒歩で5分。

歩いて通えるし、山の上に聳^{そび}え立っているわけでもないので通学には困らない。

「……つと」

ポツリと俺の頬に落ちる水滴。

「マジかよ、傘持ってきてねえ」

雷様も寝相が悪いのか、先ほどまで綺麗だった夜空を光らせ始めた。

そろそろ夏も始まるうとしている7月のはじめ。走ると夜中でも汗が滲んでくる。

今更戻るのも面倒だし、まあでも少しの辛抱だ。俺は諦めて眠い身体に鞭を打って走り出した。

中距離走を走破して、俺は学校の正門に辿り着く。しかし勿論門は嚴重に鍵を掛けられている。高さは俺の身長170の更に上の上。190ぐらいだろうか。

「ふっ、これくらいでいいの？」

俺はニヤリと口角をあげると、ジャンプ一閃。

鉄柵に素早く足を掛け、そこからさらに二段ジャンプ。

高飛びのベビローールの要領で頂点を越えると、反対側へと着地。

「今回も決まったぜ」

格好つけてはいるが、常習犯である。遅刻したときも正門は閉められてしまうので、この方法は山之上高のやつらなら誰でも習得している技術だ。

そして忘れ物組の進入経路も既に学内では暗黙の了解、調査済みだ。

「保健室の左から三番目の窓の鍵は壊れてる・・・っ」と

窓を少し押し気味に動かしてあげると、カチャリという音とともに窓が開く。一見壊れてないように見せかけているところが肝だ。

手際よく校内へと侵入すると、保健室の暗闇が俺を迎え入れる。

「そっぴゃあ、こんな時間に学校くんの初めてだな・・・」

流石に深夜に忘れ物を取りに来たことはないため、かなりの暗闇と静寂に足が竦む。備え付けの時計の音と外の雨の音だけがやけに響いて薄気味悪さを増長させる。

「・・・早く取って帰ろう」

俺は目的を遂行するため、そそくさと保健室を飛び出た。ひたひたと歩く音だけが廊下に響く。その音は妙に反響して俺の耳へと戻ってくる。賑やかな昼の様子を知ってしまったかのように、まるで裏の世界に足を踏み入れてしまったかのような。

その時だった。

るくらいの綺麗で白い肌。二重で主張するくりつと大きな眼に、自然な流れで形作る鼻。ぷるつと弾ける唇は色気も感じさせる。もうね、ど真ん中直球ストライク！見逃し三振バッターアウトですよこれ。

そんな娘がね、小悪魔的表情で俺の間抜けな姿を見て喜んでるところを想像してみてくれよ。

夜中の暗闇教室も発電所に早代わりつてもんだ。

眩しすぎて見てられん。

・・・見てられんのだが、それでも描写せねばならんだろう。ただそいつは妙なアクセサリを付けていた。

「・・・なあ、その頭に付いてるのなんて言うんだっけ？」

思わず聞いてしまったよ。だってこの娘が付けてるのって、よくお化け屋敷とかでバイトの幽霊さんとかが付けてる三角のふんどしを逆にしたようなそれと同じなんだもんよ。

「ああ、これ？天冠てんかんって言うらしいよ。・・・ってあんた！見えるの！？」

「な、何が？」

「私のこと」

見たことはないな。少なくともうちのクラスの娘じゃないだろう。

「そうじゃなくて！私自体のこと！！！」

そう言つて彼女は慌てて席から立ち上がった。そして彼女は驚くべき言葉と驚くべき身体で、俺を腰砕けにした。

「だって私、ユーレイだよ！？」

彼女は手を広げてホラと主張する。

全体が見えて、彼女の身体がどうなっているのかはすぐにわかった。足がない。制服のスカートから伸びるそれは足と言えるものではなく、よく絵で描かれるような幽霊の持つ下半身に酷似していた。そ

の下半身は動くことにゆらゆらと燃える炎ように動いて、俺の眼がおしゃかになつたのでなければ、どう見てもこの娘は幽霊と言つても差し支えないように思える。

「だ、大丈夫・・・？」

彼女が腰を抜かした俺に手を差し伸べてくる。その手を俺は恐る恐る握ってみる。彼女は握り返してきた。

温かい。人間の体温だ。

俺は彼女の力を借りて起き上がるとまずは一つ深呼吸をして、自分を落ち着かせる。

そして状況を整理しつつ、今現在俺の頭に拳がっている数ある質問候補に探りを入れる。

さて何から聞こうか・・・。

彼女は可愛いらしく首を傾げながらキョトンと俺を見つめている。

「・・・えと、あなたは一体？」

おい、そこ！俺のクエスチョンチョイスにがっかりするな！

しょうがないだろ、一応相手は幽霊なんだぞ！まずは様子見が大事だ！呪われたらどうすんだ！

「私？ユーレイだよ！」

語尾に音符でもつきそうに答える。

「それはわかった。いやわかってないけど・・・ん〜じゃあ名前！名前は？」

「え〜と・・・あ！ゆうこ！確か！」

確かってなんすか。

「・・・だつて覚えてないんだもん」

「覚えてないって・・・じゃあなんで化けて出てきたんだ？」

「し、失礼な！化けてなんてないよ！私は私！もうずっと前からここにいるんだから！」

「ずっとつていつさ？」

どこか怪しい彼女は下唇に人差し指を当てて考える。

「ん〜・・・わかんない」

埒が明かない。

「だって、本当にわかんないんだもん……。気付いたら私はこうしてこの教室にいて、私はいつもトラップを仕掛けてた」

それで毎回忘れ物組のトラップに引っかかる様を見て笑ってたんですね。

「ち、違うよ！あんたホント失礼なやつだな！」

さっき俺がかかってケラケラ笑って、「ひっかかった〜！」とか言ってた癖に……。

「　　つとそうだちよいとごめんよ」

ふと思い出して、俺は当初の目的を遂行する。

がさごそと自分の机の中を物色して目当ての物はやはりその中に封印されていた。

「……？何してるの？」

「当然忘れ物の回収さ。お前もトラップ仕掛け続けてたなら、こんな時間に人が来る理由くらい知ってるだろ？」

俺がプリントの入ったノートを彼女に見せ付けると、ノートに書いてある俺の名前を復唱した。

「くるす……すぎた……。どっちがお名前？」

「すぎたじゃねえ、さんただ」

「さんた……？くるす……。っぶ」

もういいよじゃんじゃん笑ってくれ。諦めてるから。

「フフ……。じゃあさ、」

彼女は笑いを沈めるように深く深呼吸すると、気を引き締めるように真剣で、そして憂いを帯びた表情でこう言った。

「私のプレゼントは『私がここにいる理由』と『あなたが私を見える理由』でいいよ。サンタさん」

そしてふわりと包み込むような笑顔を俺に向けてくれた。けどな、

「今は7月だ。サンタクロースは現在絶賛爆睡中だ。それにサンタは二つもプレゼントをくれるほど太っ腹じゃねえ」

腹は出てるがな。

「あ、後『私が幽霊である理由』っていうのもいいな〜」
「聞いちゃいね〜」。

「うん、まあいいや。俺課題やんなきゃならんし、もう行くわ」
そう言い残して俺が教室を去ろうとすると、彼女はかなり慌てた様子で俺の肩を掴んでくる。

「え！？チヨット待つてよ！私も連れてつてよ！」

「おま、ここに憑いてる幽霊なら移動しちゃダメなんじゃねえのか
！？」

「そんな幽霊界の常識なんて知らないよ！」

「お前幽霊じゃねえか！」

「プレゼントくれるつて約束したじゃん！！」

「約束はしてねえ！おい、ちよ、押すなつて・・・」

端正な顔がどんどんと俺に迫ってくる。なんかいい匂いするし、な
んで幽霊がこんなに色っぽいのよ！

ぐちゃぐちゃと揉み合っていると、再び大きな劈つんぱくような雷音。

「きゃあああああああああああああああ！」

「おい！あぶ・・・っ！」

激しい音と共に足を滑らせた（？）ように後ろに倒れる彼女を庇う
ため、とにかく頭を打たないようにと腕を後頭部に回してやる。そ
れは一瞬であったが、どうにか一大事は免れたようだ。（幽霊なの
で痛みがあるのかは知らんが。）

と安心するのも束の間、彼女の上に覆いかぶさるようになってしま
った。息が掛かるほど顔も近づけて、大変気まずい体勢である。

「わあああああ！す、すまん！」

慌てて俺は後ろに弾かれる様に彼女から離れた。

「あ、あ、あわ・・・」

彼女も硬直してその場で倒れていたが、ふと顔上げると彼女の元よ
り大きな瞳はこれでもかというほど見開いた。その彼女の視線は、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9473z/>

彼女は半分幽霊で

2011年12月29日17時53分発行